三

次の文を読んで、後の問に答えよ。（三〇点）

歌詠みは才覚*をおぼゆべからず。ただ歌の心をよく心得て解了*あるがよきなり。「よく心得て」とはさとる心なり。歌をよく心得たる人は、歌上手にもなるなり。我等は古歌をみる時も、「この歌の心はなにとしたる心ぞ。これは幽玄*の歌か、長高体*とや云ふべき」などあてがふなり。(1)「ここの詞をば我今詠まば、かくはえ詠むまじきよ」など思ひ侍るなり。上手の歌には、歌ごとに心をつけて案じて心得ぬ所などあらば、人に尋ね問ひ侍るべきなり。会*などにあひても、やがて懐紙*短冊*かいくりて置きて、心得られねどもおけば、(2)我が歌の位のあがることも有るまじきなり。また心得ねども、その人の言はれつれば、「さにこそあんなれ」とて、そのままおく人もあり。此方（こなた）からは「え心得られぬかし」とは申しにくき事なり。了俊*の申されしは、歌詠みどもあつまりて、歌をば詠まずして、(3)歌を沙汰あるが第一の稽古なり。また衆議判*の歌合に一度もあひぬれば、千度二千度稽古したるよりも重宝なり。たがひに非を沙汰し、是（ぜ）をあらはす故に、「人はさ心得たれども、我はさは心得ず」など云ふ事有るなり。

（『正徹物語』より）

注（＊）

才覚＝知識。

解了＝了解。

幽玄・長高体＝いずれも和歌の歌体を評する言葉。

会＝歌を詠み合う歌会のこと。

懐紙短冊＝歌会で歌を書きつける紙。

了俊＝今川了俊。正徹の和歌の師。

衆議判の歌合＝左右に分かれて歌の優劣を競う歌合の中で、左右から互いに批評し合って判定を行うもの。

**問一**　傍線部(1)を、適宜ことばを補いつつ、現代語訳せよ。

**問二**　傍線部(2)のようになるのはなぜか、説明せよ。

**問三**　傍線部(3)について、「歌を沙汰ある」の意味を明らかにしつつ、なぜそれが「第一の稽古」となるのか、本文全体を踏まえて説明せよ。